

# 性教育から考える社会意識

長津 敬斗

本論を取り上げたきっかけは、大学1年生の時に倫理学の授業を受け、中絶についての倫理的な側面や人道的な正当性について考えるようになり、中絶に関する社会的な問題や中絶の起因となっていることに深い関心を抱くようになったからである。

本論で最も着目した点は、「若年層の妊娠・中絶と性教育」の関係性である。2021年の人工妊娠中絶件数は、約12万5,000件を超え、そのうち24歳未満の中絶件数は約4万件であり、この件数と今日における性教育の在り方に関係があるのではないかと考えた。先行研究では、これまでの性教育に対して5割程度が肯定的に評価しており、役に立たないという否定的評価を上回っていることが分かった。

日本の妊娠・中絶の現状とアメリカの現状を比較し、性教育の問題点や日本における低用量ピルや緊急避妊薬の購入の難しさを指摘した。それらを改善することが不幸な人工妊娠中絶を減らすことにつながると考えた。

そのうえで「はどめ規定（中学校では性交など妊娠の過程は教えない）」の存在も知り、この規定に対しても様々な意見があることを示した。性交に関する教育は満足に行えているとは言い難い現状がある今日の性教育は、この規定によるものだとは筆者は考えた。「はどめ規定」を含む性教育の満足度を聞いたアンケートでも、この規定には否定的な意見が多かった。

このような性の社会問題に対し有効な解決策として、ユネスコが発表した「包括的性教育」が挙げられる。妊娠、避妊、性感染症といった内容だけではなく、人間の尊厳や他人を尊重することについて包括的に学ぶことができ、科学を根拠にしたものであることも現行で行われてきた性教育と違う点である。この「包括的性教育」は、学校などの教育現場だけに頼らず、家庭でも性教育を行っていくことが最も効果があると考え、家庭において性に関する話題のタブー視を無くしていくことが必要であるという結論に至った。

若年層の人工妊娠中絶は日本のみならず世界の問題であり、自分には関係ないと思っている大人こそ、自分自身が凝り固まった価値観の中で生きてないか見つめ直すべきであろう。